

副科声楽教育に関する一考察

田中 樹里

1. はじめに

本稿は東京藝術大学附属音楽高等学校（以下、本校とする）における「副科声楽」に関して、授業を担当している筆者が専門教育としての副科声楽について報告を行うものである。

日本で音楽の専門教育を行う高等学校、大学及びそれに準ずる高等教育機関では、専門実技科目の他に副科として専門以外の実技科目を履修することが多くの学校で定められている。特に副科声楽と副科ピアノは卒業要件単位であり、大学の教職課程における「教科に関する科目」の中で、必修科目として定められている。ここでは本校における実績をもとに、現在の状況を考察し、副科声楽教育における今後の課題について考える。

2. 学習指導要領——国が定める声楽教育——

日本の音楽教育では早い時期から声楽教育は重要とされてきた。明治維新の改革の一つとして文部省が明治4年に設置された翌年に学制が制定され、下等小学（6～9歳）の科目として「唱歌」が定められた。明治12年文部省は音楽教育の調査・研究機関として音楽取調掛を設置。これが後の東京音楽学校（現 東京藝術大学音楽学部）である。音楽取調掛ではその中心であった伊沢修二（1851～1917）により日本で最初の楽譜付き音楽教科書である『小学唱歌集』を発行。《庭の千草》や《蛍の光》など外国曲に日本語の歌詞をつけたものを中心に編集された。

現在、国の教育基準として文部科学省によって定められている学習指導要領は、戦後の昭和22年に試案が作成された。昭和33年より官報に告示され、以後10年ごとに改訂されている。現行の高等学校学習指導要領は平成21年3月9日に公示され、平成25年度入学生より適用されている。

高等学校学習指導要領において音楽分野では現在、芸術科（音楽）と専門教育を扱う音楽科に分けられており、本校は音楽科に該当する。

芸術科では各科目の共通の目標として以下を掲げている。

芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

芸術科では音楽Ⅰ、音楽Ⅱ、音楽Ⅲ、美術Ⅰ、美術Ⅱ、美術Ⅲ、工芸Ⅰ、工芸Ⅱ、工芸Ⅲ、書道Ⅰ、書道Ⅱ、書道Ⅲがあり、これらのうち1科目を選択し、Ⅰを履修した生徒はⅡへ、Ⅱを履修した生徒はⅢを履修することができる。音楽Ⅰでは中学校音楽科における学習を基礎にして「A 表現」の「(1) 歌唱」、「(2) 器楽」、「(3) 創作」及び「B 鑑賞」についての幅広い活動を展開し、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばすことなどをねらいとしており、音楽Ⅱ、音楽Ⅲにおける発展的な学習の基礎となる。音楽Ⅱ、音楽Ⅲでは上記の内容を含め、我が国や郷土の伝統音楽を含む多様な音楽文化についても学習し、また生徒の個性に応じて個別的な深化を図るなど、個性豊かな芸術の諸能力を伸ばすことをねらいとしている。

音楽科の目標は以下の通りである。

音楽に関する専門的な学習を通して、感性を磨き、創造的な表現と鑑賞の能力を高めるとともに、音楽文化の発展と創造に寄与する態度を育てる。

音楽科において科目の編成は、音楽理論、音楽史、演奏研究、ソルフェージュ、声楽、器楽、作曲、鑑賞研究の

8科目に定められている。今回の改訂で鑑賞研究が新設された。科目の名称、目標、内容、単位数については音楽科の目標に基づき、各学校の定めるところとする。

声楽に関しては以下の目標が掲げられている。

声楽に関する専門的な学習を通して、楽曲の表現内容を理解し、表現意図を明確にして創造的に表現する能力を養う。

声楽に関する専門的な学習内容については「(1) 独唱」だけではなく「(2) いろいろな形態のアンサンブル」も含めた学習を意味する。「(1) 独唱」は専攻として専門的に履修するものの一つであり、科目の目標を実現するために、とりわけ、個々の生徒の能力や特性等に応じた工夫ある指導が求められる。「(2) いろいろな形態のアンサンブル」は今回の改訂で「重唱」「合唱」が一つにまとめられた。生徒の特性や学校の実態等に応じて、いろいろな形態のアンサンブルの活動を行うことは、独唱の学習だけでは育成することの不可能なより一層幅広い表現の諸能力を養うことができる。また、新たに「演奏発表の場を設けるなどして、演奏を共有したり、評価し合ったりする活動を取り入れるようにする」ことが示された¹⁾。

3. 本校における「副科声楽」について

3-1. 概要

副科声楽は、履修方法が専攻実技によって異なる。専攻実技科目がピアノの生徒は1年生から必修となっており、それ以外の生徒は（邦楽専攻を含め）2年生から選択科目として履修することができる。週1回の個人レッスンを20分、1年を通して約27回から32回のレッスンを行っている。試験は前・後期それぞれ1回の計2回、1・2年生が9月と2月、3年生が9月と11月に実施している。現在は5人の声楽専門の非常勤講師により授業が行われている。

多くの生徒が声楽を学ぶのは初めてであるため、まず歌う姿勢、呼吸法の習得から指導を始める。声を出すことの仕組みを理解し、簡単な発声練習、教本を用いた母音歌唱を数か月行った後、曲に取り組むことになる。個々の課題の内容については基本的にそれぞれの講師の考え、指導法に委ねられているが、声楽初学者への基本指導を統一するため、教本は同じものを使用している。（後述）

3-2. 意義

音楽科で声楽を学ぶ意義とは何か。

（1）自分の体を知り、楽器としての声を育てる

第1に、声楽では自分の体が楽器であることを知ることである。従前の高等学校学習指導要領では「声楽に関する基礎的な技術を習得させる」ことが目標に挙げられていたが、現在は「声楽に関する専門的な学習」が示されている。中学校を卒業し、音楽の専門的な内容にふれるのは初めての生徒が多い。特に体の成長と共に声の成長が密接に関わりあう声楽を専門的に学びはじめるのに高等学校はよい時期であろう。楽器としての「声」をどのように成り立たせるか、その仕組みから理解をしていく。正しく声楽を学ぶためには専門家の指導の下、一定期間継続した訓練が必要である。

（2）歌は全ての音楽の基本

第2に、従来から言われているように、歌は全ての音楽の基本である。声楽を学びながら、全ての音楽の基礎となる事柄（リズム、フレージング、和声等）が実際の曲の中でどのように扱われ、どのように音となっているかを理解し、音楽に主体的に関わらせることがねらいの一つだ。「声」は他者とのコミュニケーションにおいても重要である。話すための「声」は歌うための「声」の元となり、「声」は自分の意志や感情を表し、美しく表現する。これらが歌を通じて将来を担う生徒たちの生きるエネルギーと精神の軸となってほしい。

本校では毎年秋に定期演奏会を開催し、合唱の舞台は必ずプログラムに組み込まれ、声を通じて学年を越えたコミュニケーションが図られる。合唱のまとめ役は生徒が行い、パートリーダーを割り当てられた生徒は、発声

や楽曲について相談をしてくる者もいる。合唱の舞台を通じて歌唱表現について興味を持ち始める生徒もいる。歌を通し、他者とのコミュニケーションを深めることが期待できる。

（３）音楽性の発展

第３に、声楽を学ぶことにより音楽表現の充実を図ることである。独唱によって学び得られることだけでなく、（２）と重複するが、アンサンブルにより学ぶことも大きい。素晴らしい演奏は必ずしも教えてできるものではない。良い音楽を聴き、感じることで表現方法や楽式を学び、その音楽に対する理解を深めて、はじめて自身の表現が語られるべきであると考ええる。副科声楽は表現意図を明確にしながら、生徒たちの持つ表現を引き出し、創造していく力へとつなげることができる科目である。

３－３．目標

声楽を学ぶ際、一定期間の時間をかけて声を訓練する必要があるため、歌うための「声」を作るという要素が強く感じられるかもしれないが、声を作ることが目的なのではない。あくまでひとり一人が楽しく歌うこと、歌を楽しむことが肝要だ。歌うことを怖がらず、また楽譜を正確に読み取り、新曲視唱や和声等ソルフェージュ力の向上も狙いの一つだ。本校では個人レッスンの形態を採用しているため、他者と比較することなく、それぞれの生徒に合った学習計画が組まれている。生徒たちは在学中、定期演奏会に限らずアカンサスコンサートや学校祭などでアンサンブルを行う機会が豊富に与えられている。アンサンブルをする中で、呼吸を合わせて楽器を演奏することやフレーズ感など、実際の体験によって学び、感じ取り、自分の専攻実技に生かしていくことが最も重要であると考えている。

３－４．授業内容

先に述べたが、本校の副科声楽は週に１度、１人20分の個人レッスンを行っている。大学などではグループで実施していることも多いため、この個人レッスンでは個々の習熟度にあった細やかな指導ができ、生徒にとってはマンツーマンで自分の課題に集中して取り組むことができる貴重な時間となっている。内容の詳細については、それぞれの講師に委ねられているため、ここでは一例として筆者が取り組んでいる内容をまとめる。

生徒の担当については、副科声楽は全員が非常勤講師であるため、年度当初に教務部によって決められる。そして、４月の初めに生徒との顔合わせを行い、レッスンの曜日・時間を決定する。

筆者のクラスでは４月の約１か月間は３人ずつ60分のグループレッスンを行っている。マンツーマンでレッスンを行う前にグループレッスンを行うことで、正しい姿勢や呼吸について、他の生徒の動作を目で確認し、客観的に理解するねらいがある。あくまで個人的な見解だが、グループでレッスンを行うことは副科声楽を履修する生徒にとって新しいことをはじめる際の恐怖心または障壁を払拭する効果があると考えている。大抵の生徒が自分の専攻実技は既存の状態が前提で、これまで自分の体について意識して考えたことがないという場合が多い。正しい姿勢を学び、歌うための筋肉や器官と共鳴に関わる体の部分、そして息の流れを一緒に確認する。一つ一つの事柄をはじめに丁寧に引き上げることによって、声楽への興味のみならず、自分の専攻楽器の仕組みや奏法についてより深い興味・関心を引き出すことができるよう工夫している。また独自の教材を使用し、この時期に簡単なモノフォニー（単声）からポリフォニー（多声）までを演習させることにしている。４月の最後のレッスンでは、レガートを意識させながら旋律を１人１音ずつ歌唱させている。一つの旋律を同時に歌うのではなく、３人で音と音の間をつなぎ１曲を仕上げる。これは呼吸と心を合わせることではじめて成り立つものだ。このように初めの１か月は生徒たちが歌を楽しめるように様々な試みを行っている。

５月のゴールデンウィーク明けからは、１人20分の個人レッスンを始める。グループレッスンで学んだ呼吸について改めて確認をする。声楽初学者に腹式呼吸は難しいため、ヨガの丹田呼吸のように丹田を意識し、ゆっくりと呼吸ができるように指導する。この際、管楽器専攻の生徒は独自の呼吸法をもっているので細心の注意が必要だ。専攻楽器の呼吸を尊重しながら正しい呼吸法に導くように努力している。特にフルート専攻の生徒は一度に吐く量が多いので、それを少しずつ同じ量で吐いていく訓練をする。これは水泳で肺活量を高める訓練と似ている。歌うための「声」の仕組みはオルガンの構造を説明すると分かりやすい。

発声練習は、それぞれの講師の特色が一番出るところだろう。講師は生徒のその日の喉の状態や今取り組んでいる課題によって注意深く内容を変化させる必要がある。筆者の経験では、ここでの指導は大変重要で、生徒たちのやる気を何倍にも大きくさせる可能性があれば、逆に一瞬にしてやる気を失くさせてしまう場合もある。特に男声については、声がうまく出ないことや声域の転換点でひっくり返ってしまうことで、本人が気にすることがある。その際、ファルセットは使わずに中低音の訓練に集中すると心理的影響をあまり受けにくいようだ。発声課題については、講師の独自のものであるところが大きい、副科声楽の試験の際、きちんとした発声を学んでいるかということは、最も注目される項目の一つである。

発声練習をして声を出すことに慣れてくると、イタリアの教育者 P.G.G コンコーネ (1801~1861) の教本『コンコーネ 50番』を使用する。これは前述した全員指定の教本で、歌詞のないヴォカリーズの練習曲が50曲掲載されている。これを音名や母音によってデユナーミクに留意しながら歌っていく。この教本は様々な要素が含まれており、イタリアではプロフェッショナルの歌手育成の基礎練習として、1年もしくは2年コンコーネを学習することが良いと言われている。本校の副科声楽では楽曲に取り組む前に、まずコンコーネを学習させることにしている。歌詞のある歌曲に取り組む前に、器楽奏者である生徒たちの音楽性を引き出していくのに最適な教材であると考えている。声楽を学び始めると、どうしても元々持っている声の良さや声量が気になりだす生徒もいるが、この段階では息の流れを最も重要な事柄と考え、声の響きと母音が均等に歌えるか、また母音唱法によって適切な音楽表現がなされているかを見ていく。この練習曲にはタイトルや作品内容に関する指定がないため、生徒自身が想像し、そのイメージを声の表現としてどのように具現化していくのかを考えさせるのに良い。彼らの内部にあるイメージを言葉にすることは難しいが、言葉にする機会をもたせることにより新たな発見も生じる。驚くべきことに生徒たちにとっては、感情やイメージを音楽だけでなく、言葉で語ることは楽しい作業のようだ。ここでは発声に関して細かく指導しない。時間をかけて声が正しい方向へ育つように指導している。

日本では、声楽初学者の最初の歌詞つきの教本として A.パリゾッティ (1853~1913) による『古典アリア集』*Aria antiche* を学ばせることが一般的だ。本校でも『コンコーネ 50番』に少し慣れてきたところで、パリゾッティ版を基にした日本の出版社のものを共通の教本として採用している。パリゾッティ版は17世紀、18世紀のイタリア古典歌曲やアリアを19世紀にイタリアの歌曲が注目された際にまとめたもので、当時の時代背景や演奏習慣に則り、忠実に編集を進めたものではない。19世紀後半にリコルディ社より出版されてから、今日に至るまでこの教本に収められている個々の作品の歴史的背景については多くの研究がなされており、単に正しい発声で古典イタリア歌曲を学ばせるのではなく、最新の学術研究の成果を本校講師の間でも情報交換しながら進めている。古典イタリア歌曲は本校の副科声楽の授業の中心的教本である。筆者のクラスにおいて、声楽初学者は前期の試験の前に最低1曲、イタリア古典歌曲を学ぶ。試験の曲が決まると、その曲を何度も時間をかけて学習する。初めての試験でイタリア語の歌曲を1曲仕上げて暗譜することが彼らにとってプレッシャーにならないよう、できるだけシンプルで美しい歌曲を選ぶよう心掛けていく。また、新しい語学の曲を学ぶときには、まずその言語のアルファベットと特徴的な綴りを学び、音読することからは始めている。生きた語学を文法も含めて学ぶことも大切だが、歌うための語学（舞台語）として音を感覚で学んでいくことも大切であると考えている。

本校では、2年生のピアノ専攻者の後期試験課題はドイツリートと決められている。これは本校の副科声楽で大変特徴的なことである。本来、声楽初学者（声楽を学びはじめて2年目であっても初学者に該当する）はドイツリートを学ぶことは珍しい。これはイタリア古典歌曲と比較して、言語自体の問題が挙げられるからである。イタリア語はインド・ヨーロッパ語族の言語の中でもフランス語やスペイン語と類を同じくし、ドイツ語は英語や北欧のノルウェー語やスウェーデン語と同じ語派に属する。イタリア語はドイツ語と比較すると、アクセントを伴う母音の長さに特徴がみられるが、子音の発音処理が難解すぎることはなく、比較的歌いやすい言語であり、アルファベットをそのまま発音する綴りが多いことから、取っ付きやすい言語と言えるかもしれない。対してドイツ語は子音自体の存在が大きく、明瞭な発音が求められる。まず言葉に慣れるのに時間がかかる上、それを歌うことは声楽初学者にとって容易ではない。イタリア古典歌曲とドイツリートは音楽面での違いはもちろんだが、特にドイツリートは、詩の重要性が大きいのに特徴がある。有節歌曲においては、同じ旋律が何度も繰り返されるので、歌詞の内容をきちんと把握してはじめて、表現につなげることができる。詞を勉強することもおろそか

にしてはならない。

次に、伴奏について述べる。伴奏はピアノ科の生徒にとって、歌うことと同様もしくはそれ以上に重要な勉強の場となるはずである。歌の伴奏は、歌唱をするものの呼吸に合わせてピアノを弾く。また両者におけるバランスも重要だ。以前は試験前に伴奏者とレッスンに来るのは任意であったが、その重要性和教育効果に注目し、現在は試験前には必ず伴奏者とレッスンに来るように統一して指導をしている。ドイツリートでは、伴奏者の重要性は極めて高い。海外のマスタークラスなどでは、「伴奏者」ではなく、声楽家とピアニストが1つのデュオとして考えられている。どちらが欠けても完成することのない繊細な表現の世界である。古典イタリア歌曲の伴奏は、豊かな流れの音楽の中で、互いに呼吸を合わせて演奏する効果的な学習になり、ドイツリートでは、ピアニスト自身の積極性も求められる。古典イタリア歌曲とドイツリート両方を勉強することにより、それぞれの特色を振り返ることで相乗的な学習効果が得られると考えている。

3-5. 試験

本校における副科声楽の試験は年に2回あり、それぞれの試験に大まかなテーマを決定している。声楽においては声種や声の特徴によって曲が定められている場合もあり、個々の生徒の特性、習熟度などを鑑みて担当教員が曲を決定する。歌唱する生徒は暗譜で演奏する。また毎回、自身でピアノ伴奏者を選出し、試験前には伴奏者と共にレッスンを受けることを義務付けている。

前期試験（9月）には、副科声楽を履修している3学年全員が試験を受ける。1年生から必修科目として履修しているピアノ専攻生および2年生から選択科目として履修するピアノ専攻生以外の生徒は約半年の間に呼吸法、コンコーネを学び、イタリア古典歌曲の中から試験用の曲を1曲提出しなければならない。声楽初学者にとって半年で曲を仕上げるのは難しい場合もある。数年前まではコンコーネを試験で歌う生徒もいたが、最近では全員曲を歌う傾向にある。3年生はイタリア古典歌曲をひと通り終えて、それぞれの特性にあったものを選曲している。イタリアの歌曲ではドナウディやトスティ、ドイツリートはシューベルトやシューマン、フランスのメロディーや日本歌曲を歌うこともある。

後期試験（11月）は3年生の学年末試験である。副科声楽の授業の集大成として、難易度の高いオペラアリアに挑戦する者もいる。3年生になると将来の留学を見据えて語学を習いはじめる生徒もいる。生徒とコミュニケーションをとりながら、生徒の好みと方向性を汲み取り、注意深く選曲するようにしている。また、生徒たちがこの試験の後、充実した音楽経験と達成感を経て受験勉強に集中できるよう、やり甲斐のある曲を選ぶことも重要であると考えている。

後期試験（2月）は1、2年生の試験である。2年生のピアノ専攻生のみ課題がドイツリートと決められている。ドイツリートはシューベルトの歌曲から始めるように指導をしている。1年生から学んできたイタリアの音楽曲と区別して、のびやかなドイツ音楽の詩と音楽が一体になる世界観、様式を学ぶ。伴奏も重要で、ピアノ専攻の生徒には良い機会となっている。試験はシューベルトに限らず、シューマンやベートーヴェン、モーツァルトの歌曲を選んでも良い。2年生のピアノ専攻生以外の生徒は、副科声楽の授業を履修して2回目の試験となる。前期試験の課題を踏まえ、引き続きイタリア古典歌曲を歌う。

各試験は3年生、2年生、1年生のピアノ専攻生、3年生、2年生のピアノ専攻生以外の生徒の順に行っている。これは他の副科の試験を同日に実施することがあるためで、特に理由があるわけではない。場所はアンサンブル室を使用することが多く、ホールで行うこともある。ステージの真ん中にはグランドピアノが用意され、自分の順番が来たら、伴奏者、譜めくりをする者と同時に入室する。中央で挨拶をしてから、氏名と番号を述べて歌唱を始める。終了後は挨拶をして退出する。試験の際は服装、ステージマナーを含め、学校以外で演奏する際にもきちんと対応できるように指導している。

試験の評価は、それぞれの教員に委ねられているが、技術的評価と共に授業態度や課題に対する取り組みなどにも目を向け、総合的に判断するように心がけている。また、伴奏者と十分に合わせをしたかも重要だ。試験後の成績会議では、担当の生徒のみならず、受験者全員を対象としてコメントが述べられることが多い。半年ごとにどのような成長をしているかをしっかりと見定めて、今後の指導計画が組まれていく。

3-6. 副科声楽の授業に関するアンケート結果より

平成22年度から平成26年度に本校で行われた記名による「授業・学校生活に関する生徒アンケート調査結果」による分析である。副科声楽は以下の8項目に関する質問が行われた。

- ①副科声楽のレッスンは定期的に行われていますか？
- ②休講はありますか？
- ③休講の場合、補講はありますか？
- ④副科声楽のレッスンを休むことはありますか？
- ⑤レッスンの内容を理解出来ていますか？
- ⑥レッスン曲はあなたのレベルに合っていますか？
- ⑦レッスン曲は試験曲以外のものも勉強しましたか？
- ⑧副科声楽について希望があれば聞かせて下さい。

結果の詳細については以下の表1から表8に示す。

①から④の質問については、各曜日の年間レッスン回数は各年度の年間計画において定められており、休講の場合は必ず補講することになっているため、授業は定期的実施されているはずだが、補講がないと回答している生徒が少数ながら存在する。講師の先生方、それぞれの事情もあることと思うが、改めて休講の連絡及び補講に関して生徒と密に連絡をとるように心がける必要があると感じた。生徒の欠席については、残念ながら学校行事などで専攻実技レッスンの変更が時々あり、副科声楽を欠席せざるを得ない場合もある。欠席が続く場合には、それぞれ担当の先生方の判断により定められた時間以外で日程を調整し、時間変更という形で補講を行っている。

授業の習熟度に関する⑤から⑦の回答を見ると、レッスン内容に関しては概ね理解は出来ていることが分かる。個々のレベルに合っているかどうかは、3年生で少し難しいものに挑戦させることも副科声楽全体で推進しているの、生徒にとっては急にレベルが上がったと感じられるのかもしれない。レベルに関して表6が示すように2年生、1年生で易しすぎる、難しすぎるという回答をした生徒がいないことから、それぞれの生徒にあった学習計画がしっかりと組まれ、丁寧な指導が行われていることが分かる。また、試験以外の曲に取り組んだかどうかは、副科声楽では曲に取り組む前に発声指導やコンコーネの時間を充実させていることから、特に重要視していない。自身の習熟度にあった課題に取り組むことが大切だ。

⑧の質問に関しては、生徒の正直な要望や感想が見て取れる。1年生からは、「試験の時の雰囲気が怖い/月曜日は休みが多いので、補講を増やしてほしい/歌い方についてもう少し詳しく習いたい/これからたくさんの曲を歌いたい」といった声が寄せられた。1年生はピアノ専攻生にあたるが、毎年真面目な生徒が多い。よく質問も受け、向学心、向上心がある。早く結果を求めるような部分もあるので、声楽は時間をかけて取り組む性質の科目であるということを強調している。試験に関しては、ステージの中央に立って試験官の前で歌うことがはじめてであるので極度に緊張するようだ。筆者のクラスでは試験前の最後のレッスンで、試験が事前にイメージできるようにステージマナーからひと通り、確認をするようにしている。また地方から出てきて一人暮らしをしている生徒もあり、心身共にバランスを崩しやすい学年だ。歌は健康状態が直接関係してくる。1週間に1度のレッスンだが、出来るだけ話を聞き、生徒の状況を判断できるように努めている。

2年生からは「楽しいので時間を増やしてほしい/たくさんできるように頑張りたい/先生を選択できるようにしてほしい/もう少し音域が高いものをやりたい/隔週がいいなと思うことがある/曜日によってレッスン回数の差があって悲しい」という回答があった。2年生は2年目のピアノ専攻生と1年目のピアノ以外の専攻生が該当する。学校生活に慣れ、修学旅行など学校行事にも忙しい学年だ。1年生同様、曜日による授業数の差に関する意見もあるが、現在は年間の授業数が少ない曜日に関しては試験前に必要であれば補講をするなど改善している。音域に関しては、筆者のクラスでは、発声とコンコーネを勉強した後、イタリア古典歌曲の中声用を勉強するのが一般的だ。男声で低声用を使用する場合もあるが、初学者には高声用を与えていない。これは中低音が安定してはじめて正しい高音の学習へ移行できると考えているからである。しかし、要望があれば無理のない範囲で試

副科声楽教育に関する一考察

験曲を移調させるなどして歌わせることもある。

3年生からは「試験の講評が担当者以外からも聞きたい/とても楽しい/時間通りに始めてほしい/発表会をしたい」との意見が聞かれた。試験終了後は会議があるのだが、自分の担当でない生徒でも講評を聞かれれば喜んで答えることにしている。時間に関しては、試験前に少しレッスンを延びることはあっても時間は守られているのではないだろうか。3年生は特に3学年の中でもリーダーシップをとり、やることが多く忙しい学年だ。20分という非常に短い時間だが内容の濃い授業をすることが必要だ。

表1：副科声楽のレッスンは定期的に行われていますか？

(単位 人)

	3年生	2年生	1年生
平成22年度	はい31 まあまあ0 いいえ0	はい37 まあまあ0 いいえ0	はい11 まあまあ0 いいえ0
平成23年度	はい38 まあまあ0 いいえ0	はい38 まあまあ0 いいえ0	はい12 まあまあ0 いいえ0
平成24年度	はい34 まあまあ0 いいえ0	はい33 まあまあ1 いいえ0	はい11 まあまあ1 いいえ0
平成25年度	はい34 まあまあ0 いいえ0	はい30 まあまあ0 いいえ0	はい13 まあまあ1 いいえ0
平成26年度	はい28 まあまあ0 いいえ0	はい34 まあまあ0 いいえ0	はい12 まあまあ1 いいえ0

表2：休講はありますか？

	3年生	2年生	1年生
平成22年度	はい4 ときどき23 ない4	はい5 ときどき13 ない19	はい3 ときどき3 ない3
平成23年度	はい11 ときどき16 ない11	はい8 ときどき16 ない14	はい2 ときどき3 ない7
平成24年度	はい12 ときどき11 ない11	はい3 ときどき18 ない13	はい3 ときどき4 ない5
平成25年度	はい11 ときどき15 ない8	はい9 ときどき8 ない13	はい2 ときどき6 ない6
平成26年度	はい4 ときどき16 ない8	はい2 ときどき15 ない17	はい1 ときどき5 ない6

表3：休講の場合、補講はありますか？

	3年生	2年生	1年生
平成22年度	はい22 ときどき1 ない2	はい26 ときどき1 ない4	はい6 ときどき0 ない0
平成23年度	はい27 ときどき0 ない0	はい24 ときどき0 ない0	はい4 ときどき1 ない0
平成24年度	はい29 ときどき1 ない0	はい21 ときどき0 ない0	はい8 ときどき2 ない0
平成25年度	はい30 ときどき0 ない1	はい14 ときどき3 ない0	はい8 ときどき3 ない1
平成26年度	はい22 ときどき1 ない1	はい27 ときどき2 ない0	はい9 ときどき0 ない1

表4：副科声楽のレッスンを休むことはありますか？

	3年生	2年生	1年生
平成22年度	はい6 ときどき8 いいえ13	はい5 ときどき13 いいえ19	はい2 ときどき1 いいえ8
平成23年度	はい7 ときどき17 いいえ14	はい3 ときどき10 いいえ25	はい2 ときどき2 いいえ8
平成24年度	はい6 ときどき6 いいえ10	はい2 ときどき14 いいえ17	はい2 ときどき3 いいえ7
平成25年度	はい3 ときどき15 いいえ16	はい6 ときどき11 いいえ13	はい0 ときどき3 いいえ11
平成26年度	はい6 ときどき18 いいえ5	はい3 ときどき3 いいえ29	はい1 ときどき0 いいえ11

理由：専門実技のレッスンと重なる/体調不良/病院/試演会/本番/忘れてしまった

表5：レッスンの内容を理解出来ていますか？

	3 年生	2 年生	1 年生
平成22年度	はい25 まあまあ2 いいえ0	はい33 まあまあ4 いいえ0	はい8 まあまあ3 いいえ0
平成23年度	はい37 まあまあ1 いいえ0	はい33 まあまあ4 いいえ1	はい12 まあまあ0 いいえ0
平成24年度	はい31 まあまあ3 いいえ0	はい29 まあまあ5 いいえ0	はい6 まあまあ5 いいえ0
平成25年度	はい34 まあまあ0 いいえ0	はい28 まあまあ1 いいえ0	はい13 まあまあ0 いいえ0
平成26年度	はい27 まあまあ1 いいえ0	はい33 まあまあ1 いいえ0	はい12 まあまあ0 いいえ0

表6：副科声楽レッスンはあなたのレベルに合っていますか？

	3 年生	2 年生	1 年生
平成22年度	はい27 易しすぎる0 難しすぎる0	はい37 易しすぎる0 難しすぎる0	はい10 易しすぎる0 難しすぎる0
平成23年度	はい38 易しすぎる0 難しすぎる0	はい37 易しすぎる0 難しすぎる0	はい12 易しすぎる0 難しすぎる0
平成24年度	はい32 易しすぎる0 難しすぎる1	はい33 易しすぎる0 難しすぎる0	はい12 易しすぎる0 難しすぎる0
平成25年度	はい34 易しすぎる0 難しすぎる0	はい30 易しすぎる0 難しすぎる0	はい14 易しすぎる0 難しすぎる0
平成26年度	はい27 易しすぎる1 難しすぎる0	はい33 易しすぎる0 難しすぎる0	はい12 易しすぎる0 難しすぎる0

表7：副科声楽レッスン曲は試験曲以外のものも勉強しましたか？

	3 年生	2 年生	1 年生
平成22年度	はい22 少し3 いいえ2	はい29 少し6 いいえ2	はい9 少し1 いいえ0
平成23年度	はい31 少し6 いいえ1	はい25 少し4 いいえ9	はい12 少し0 いいえ0
平成24年度	はい29 少し3 いいえ2	はい33 少し0 いいえ0	はい9 少し0 いいえ3
平成25年度	はい28 少し2 いいえ3	はい24 少し2 いいえ4	はい11 少し2 いいえ1
平成26年度	はい24 少し0 いいえ4	はい29 少し0 いいえ5	はい12 少し0 いいえ0

表8：副科声楽レッスンについて希望があれば聞かせてください。

	3 年生	2 年生	1 年生
平成22～26年度	試験の講評が担当者以外からも聞きたい/とても楽しい/時間通りに始めてほしい/発表会をしたい	楽しいので時間を増やしてほしい/たくさんできるように頑張りたい/先生を選択できるようにしてほしい/もう少し音域が高いものをやりたい/隔週がいいなと思うことがある/曜日によってレッスン回数の差があつて悲しい	試験の時の雰囲気が怖い/月曜日は休みが多いので、補講を増やしてほしい/歌い方についてもう少し詳しく習いたい/これからのたくさんの曲を歌いたい

4．今後の課題

4-1．内容（評価）に関して

現在、常勤の声楽専門の教員はいないが、5人の非常勤講師の間で評価に関する考えは一致している。ここで文部科学省の定める目標について再度考えてみたい。「声楽に関する専門的な学習を通して、楽曲の表現内容を理解し、表現意図を明確にして創造的に表現する能力を養う。」副科声楽として技術的評価だけではなく、以上を踏まえた音楽的な内容とのバランス、生徒が豊かな感受性と想像力をもてるような環境作りが重要である。常にこれらが一定に保たれるよう教員自身の人間性向上、広い視野、更なる研究が望まれる。

4-2．学習内容に関して

副科声楽は大学においては、教員免許状取得のために必修と定められており、器楽専攻者にとっては将来学校

現場で教える場合に欠くことのできない重要な科目の一つである。現在の学習内容でも十分な内容が定められているが、今後については、日本の歌曲や童謡に関しても積極的に指導を行ってもよいのではないかと提案する。現在、高等学校芸術科（音楽）においても歌唱は時間が限られており、また高等学校で音楽Ⅰ、音楽Ⅱ、音楽Ⅲを選択せずに音楽大学へ進学するという例も出てきている。本校は音楽科であり、声楽の授業において日本語で歌うことを経験させることは有意義ではないだろうか。

4-3. オープンな教育環境

副科声楽では年度当初に取りまとめ係を決定し、担当の常勤教員と密に連絡をとるようにしている。係は毎年担当者が代わり、全員が経験するようになっている。可能な限り学校全体の成績会議にも出席し、常勤教員と副科声楽担当者との間で情報を交換し、報告が出来るようにしている。個々の生徒に関しては担任と連携をとることもある。今後も他教科の教員ともオープンに意見交換が出来るような場があれば、生徒たちの環境向上につながると考えている。また、副科声楽の授業で教員が生徒のモデルとなり歌唱する場面は多いが、今後生徒たちと共演する機会があれば、また新たな研究成果が期待できるかもしれない。

5. まとめ

スーザン・A・オニールとゲーリー・E・マクファーソンは、編著中の音楽における動機づけを扱った章で、チクセントミハイのフロー理論について、以下のように引用している。

チクセントミハイのフロー理論の核心部分によると、神経を強く集中して何か活動をしているとき、本人が気づいている挑戦（challenge）のレベルと技能（skill）のレベルが同程度で均衡している場合に“フロー”と呼ばれる最高の心理体験ができるという（Csikszentmihalyi, 1990）

この説明によれば、挑戦レベルがその人の技能レベルに合っているとき、活動が楽しく感じられる。一方活動が易しすぎて、その人の技能レベルが高い場合はだんだん退屈になっていき、難しすぎて技能レベルが低い場合は不安が生じる。そして、挑戦レベルと技能レベルが両方とも低い場合は無関心になるということだろう²。

音楽は純粋なものである。「音楽が好きだ」と目を輝かせて本校に入学してきた生徒たちの気持ちに勝るものはない。無理に教えようと思っても、相手が望んでいる状態をきちんと把握し、導いてやる事ができなければ、期待の大ききの分、失望も大きくなるだろう。声がなかなか出ない生徒にとっては、毎週のレッスンが苦痛になることもある。自信の喪失、無力感、そのような時は動機づけが必要だ。評価にとらわれず、音楽を学ぶという行為が喜びであることを再認識させ、そして人間対人間として接することが大切だ。アンケートでは、総じて歌に対する前向きな意見が聞かれて嬉しく思っている。他の副科科目に関しては「副科」というだけでレッスンに関する動機を持ちにくいと報告されているが、副科声楽に関してそのようなことは報告されていない。これは、それぞれの講師の先生方の力によるものであると感じている。3年生からの意見で「発表会」をしたいというものがあった。2年間もしくは3年間学んできた成果を試験だけでなく、みんなで分かち合うというのは、忙しい3年生にとって現実的には難しいかもしれないが、いつか実現されることを願っている。

「声」の力というのは我々声楽の教員が想像する以上に、人間的で、劇的で、心に響くものであることを日々実感している。

注

- 1 文部科学省『高等学校学習指導要領解説』（平成21年12月）「第1部第2章第1節音楽」11頁、「第2部第2章第5節声楽」154頁
- 2 スーザン・A・オニール、ゲーリー・E・マクファーソン「第3章 動機づけ」（リチャード・パーンカット&ゲーリー・E・マクファーソン編『演奏を支える心と科学』 誠信書房 平成23年9月）55頁

参考文献

- 文部科学省『高等学校学習指導要領』（平成21年3月）
文部科学省『高等学校学習指導要領解説』（平成21年12月）
畑中良輔『中学生の音楽1』（教育芸術社 平成21年2月）
畑中良輔『中学生の音楽2.3』（教育芸術社 平成21年2月）
畑中良輔『高校生の音楽2』（教育芸術社 平成21年1月）
畑中良輔『Mousa 1』（教育芸術社 平成20年2月）
畑中良輔『Mousa 2』（教育芸術社 平成20年2月）
小原光一『Mousa 2』（教育芸術社 平成25年3月）
リチャード・バーンカット&ゲーリー・E・マクファーソン編『演奏を支える心と科学』（誠信書房 平成23年9月）
沼田宏行「副科ピアノ教育についての考察」（『東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校研究紀要』第9集 平成26年3月）